



蘭
學
抄



寬政庚申正月鑄

金雞先生編輯

蘭雪愚抄

瑞玉堂梓

いさふりつものきつ乃無そ
うかふふふふふふふふ人乃
わきふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふ
いさふりつものきつ乃無そ
うかふふふふふふふふ人乃
わきふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふ

庫文部

書

暖月乃るの都よいふんよめり
よききききき

かきふふ

五年

唐志抄

寛政

初

の

初

闇雲抄をちりちり

六金雞大人此社盟は河川系寝詰行美憐ぬ一乃らは
をける。帳秘あふ成。たのれ請求もく。むく目向あふ。岩清あ。
清くもあふ。えふ。もく。子まるこれさし。伊豫の湯々々。
よみもあふ。くふ。おほゆふ。その。軽く乃。詞をさく。
加。あふ。あふ。う。お。お。の。な。れ。あ。え。お。や。い。と。わ。り。あ。
は。あ。よ。こ。み。子。様。あ。は。し。む。く。を。さ。く。ち。り。す。敷。を。寝。詰。行。
の。つ。つ。く。く。こ。み。か。さ。秘。て。う。し。れ。く。も。と。の。を。あ。ふ。志。の。
あ。は。う。く。れ。小。伎。子。あ。ふ。く。ふ。い。十。と。せ。あ。あ。う。の。む。く。あ。く。そ。
一。附。少。子。の。遊。戯。あ。う。く。く。や。い。巴。人。の。鄙。曲。を。出。く。陽。
ま。の。高。綱。子。志。く。披。そ。う。く。く。子。團。手。の。名。を。う。く。傳。ふ。

あれハ。毛素又。志く。居く。ち。ひめく。志く。せ。け。か。ひ。ぬ。あ。う。こ
 きた。あ。う。ま。て。む。後。こ。う。ま。ん。ハ。罪。の。う。止。難。く。あ。う。ん。お。と。ゆ。へ
 事。れ。と。唐。々。々。名。言。ん。れ。志。進。も。の。も。あ。お。の。河。を。う。り。飯。を。を
 あ。う。い。ち。ま。う。に。投。を。く。く。う。く。目。ら。た。こ。の。名。も。ま。よ。り。進。け
 して。わ。り。ま。か。み。海。は。く。え。り。や。く。ま。と。も。の。ち。除。繡。を。ま。と
 り。ん。子。ち。あ。れ。う。め。く。く。く。と。と。う。て。や。や。み。あ。ん。さ。う。い。り。し。の
 々。ま。く。あ。る。ま。の。よ。う。う。く。れ。あ。う。く。を。あ。う。い。け。う。く。れ
 今。ま。く。あ。あ。く。あ。ま。ま。こ。う。い。あ。あ。や。せ。ゆ。や。美。情。子。笑。ひ
 を。あ。く。む。梓。け。は。ま。何。く。あ。く。か。く。乃。こ。や。寛。政。十
 あ。う。う。あ。う。の。と。梓。の。本。れ。め。ま。る。乃。あ。う。く。文。を。さ。く
 や。ら。と。れ。か。り。よ。

瑞玉堂主人志るるる

蘭雪愚抄目録

卷一 春之部

一	年内立春	二	立春	三	元日
四	早春	五	初春	六	子日
七	恙菜	八	蕨	九	雪
十	除寒	十一	残雪	十二	恙草
十三	梅	十四	柳	十五	早蕨
十六	花	十七	春月	十八	春曙
十九	遅日	廿	遊糸	廿一	春雨
廿二	春約	廿三	帰雁	廿四	雛子
廿五	喚子鳥	廿六	苗代	廿七	董

廿八 三月三日
廿一 款冬
廿四 蕈
廿七 三月盡

卷二夏之部

一 更衣
四 殘花
七 葵
十 早苗
十三 五月雨
十六 螢

廿九 牡若
廿二 蛙
廿五 雲雀

二 首夏
五 新樹
八 時多
十一 照射
十四 魚橘
十七 水鷄

三十 菘花
廿三 躑躅
廿六 暮春

三 卵花
六 牡丹
九 菖蒲
十二 犛河
十五 瞿麥
十八 蚊遣火

十九 夏月
廿二 夕顏
廿五 夕立

廿 夏草
廿三 蟬
廿六 納涼

廿一 蓮
廿四 冰室
廿七 荒和菰

卷三秋之部

一 立秋
四 七夕
七 秋
十 蘭
十三 野分
十六 槿
十九 月

二 早秋
五 草花
八 女郎花
十一 雁
十四 雲霞
十七 秋夕
廿 鶉

三 殘暑
六 萩
九 落
十二 鹿
十五 霧
十八 豹途
廿一 鴨

廿二	廿五	廿八
秋田	菊	紅紫
廿三	廿六	廿九
攝衣	九月九日	暮秋
廿四	廿七	三十
虫	葛	九月尽

卷四冬之部

一	四	七	十	十三	十六	十九
初冬	时雨	雪	子冬	烟代	霜	埋火
二	五	八	十一	十四	十七	二十
层紫	霜	寒芦	冰	神樂	炭竈	歲暮
三	六	九	十二	十五	十八	廿一
残雪	霰	冬月	冰雪	佛名	衾	除夜

卷五冬之部

一	四	七	十	十三	十六	十九	廿二	廿五	廿八
冬	冬	初冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬
二	五	八	十一	十四	十七	二十	廿三	廿六	廿九
初冬	待	後	思	同	新	於	久	忘	知
三	六	九	十二	十五	十八	廿一	廿四	廿七	三十
思	冬	冬	片思	足	別	坊	近	終	等思

七 四 一 卅九 卅六 卅三 卅四 卅七 卅一

思三人魚
寄月魚
寄山魚
寄水魚
寄鳥魚
寄玉魚
寄紅魚
曉
海
寄信

卷六雜之部

八 五 二 卅五 卅七 卅四 卅一 卅二

寄天魚
寄雲魚
寄閑魚
寄木魚
寄獸魚
寄糸魚
寄弓魚
松
山
群

九 六 三 卅八 卅五 卅二 卅六 卅三

寄地魚
寄風魚
寄火魚
寄竹魚
寄魚魚
寄硯魚
竹
苔
澗

十 十三 十六 十九 廿二 廿五 卅 卅七 卅四 卅一

招
旅
老人
楊貴妃
寺
述懷
附錄
狂哥身由
片頭
子尔と系
六義

十一 十四 十七 廿 廿三 廿六 卅一 卅八 卅五 卅二

関
田家
托女
着
神紙
祝
狂の一字
傍類
三群
十群

十二 十五 十八 廿一 廿四 廿七 卅二 卅九 卅六 卅三

別
山家
王耶君
毎常
懐舊
題取後方
云居歌
皮肉骨
躰用對

十三	禁忌	十四	七種菜	十五	鞠場四木
十六	承香殿四傑	十七	新六哥仙	十八	利永壺五人
十九	五婦人	廿	三條三世	廿一	三部書
廿二	六国史	廿三	二十代和哥集	廿四	萬系條各
廿五	古狂哥書	廿六	今狂哥書	廿七	五行五題
廿八	五味五歌	廿九	六拍六首	三十	七夕七首題
卅一	重陽九首	卅二	十界十歌	卅三	十如是十題
卅四	十二夜十三題	卅五	十五夜十五歌	卅六	堀川太帝百題
卅七	堀川次帝百首				

同録畢

厩雲愚抄卷一春之部

一 年内立春

年の内あるま 一とをさしつゝみたる 一 系とくはみたり
 一とをさしつゝみたる 一 系とくはみたり 一 系とくはみたり
 一とをさしつゝみたる 一 系とくはみたり 一 系とくはみたり
 一とをさしつゝみたる 一 系とくはみたり 一 系とくはみたり

二 立春

一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の
 一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の
 一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の
 一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の

一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の
 一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の
 一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の
 一ハまたり 一ヤあらん 一あら玉の 一 万代の

子代のよりー ーとふか ーすれや 花のー ーはあまふ
霞をひら 天の戸は光 佐保唯の子殿の衣 ちれを門し
とと朝のちるは道の子れをふれは言て又守り立かすそふ定
是料をたおつらうはよるまのふさう 鼓打るをふふ光

三 元日

掛をさるを夕にまつ免れは今日経るあをふ元日 軽人

四 早春

果のよふあま流めくをいそとつちふあふちをふふあふ 辰登

五 初春

うをたあまふをよこさみの大おぼる解の值りかやうそくう 全結

六 子日

子代の日ーの友ひめ小松 ちのねの松 思うふはひく 野への小松
子代のちり免 松の子年 春の節とあ 忘ねの松 ひくまの節へ
春日野 子代のおな 龜の尻山 をとこ山
法娘よあしぬ子日れ唯小松あしを徒登のよよおふく 仲往
女衛とと人やうめんたましれあうき松を引くはぬ進ハ 葉入

七 若葉

ちのねのさーつを 野をのー ちのねのさー 雪居れー ちのねのー
霞のー ちのねのー 法をさむさー ちのねのー 朝の野をさ
大まや人 野をさるるる系 古野 春日野 花火野
春日野の花火はあふり出とんとつくううてそくつあはまん 赤良
つこちやばあふあはるは白拍子あふあを画のせんさふその 梅洲

八 晨

うきふき 八まー 初ー 朝ー 夕ー ー ー ー
しこむか ーの衣 ー ー ー ー ー ー ー
ーむ夕れ ーのまぢ かのー ー ー ー ー ー
初晨茅も種類 ー ー ー ー ー ー ー ー
そほひひらひておー ー ー ー ー ー ー ー

九 雪

うらひを 雪 ー ー ー ー ー ー ー ー
雪のー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
あひてふ雪 梅の花 雪 朝 夕 ー ー ー ー
力をもつれに 氷 成 ー ー ー ー ー ー ー ー

十 除寒

雪の行は 生れ ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

十一 残雪

雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

十二 雪州

雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
雪の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

草のたつらうらうらわらぬ あさこころり 香れ下りえ
生輝ハ縁よけよきもさるるまにまを結らんをそねりか 栞御

十三 栞

むめ のたはれー 春のー 垣ぬのー ーうえ 夏木のー 老木のー
ーのすえ 袖のーぐ 風のー ーま かなれー 白ふあう 秋のー
白ふま 露波 水所 高深 くらふ山 栞は
松波 侍を寄ふこまてのさふも春の白ひのまちくの栞 金輝
さこまてのつらうらぬー 袖とあちこちの死群の栞う 雲

十四 柳

やあきー ーれ系 春ー 春のー 春のくはー 同のー 又木のー
ーのふふー ーの髪 風によろき せめてみるさめ ぬひく

みとりのすめ かなと ころふ 穢沢の池 ぶむられきー

糸死に似る糸柳をうめー 極く浮世のちうとまふ死生え 金鶴

甚風よこまつられて青柳のわれ世ふほとにまて死をする 佐々

十五 早蕨

さつらひ ー出ふ 松の下つらひ 甚のー 岩のー 手折ー

おとら下 山つと 踏くをゆく ちら子にあぬ 甚日 珠 袖ふら山

佐保姫の法師が山れ脊をうにまてむと何巴は守りさつらひ 金鶴

ゆえおとみとりの子のゆれゆれくやあははるぐ 甚のさつらひ 高峯

十六 花

ーのたれとー 凍衣かきれー ーれ下ひも ーの枝折 ー乃雲

ーのたれみ ーれ唇 めくれぬー ーさう 様うさ 花の志る雲

みどり跡 初瀬をく不山 わくく山 喜羽山 大比を 清水
大井川 高海と山 かつらき山 とむら山 ちく川の岸
よる跡山去身の枝折をえ遠くうらほく程の花燈をかた丸
見さる風をふく門まさくふ花よふ庭の音を採れしと雲 橋脚
舟寄の飯もむすく様うとちしあていむよきあひ 光
一アしをふくのほ糸うくてもるさハ浮世の動定乃か 善形
入のうの子せまてて今うさい月代よもも花を分ぬ 裏成
ますねとにふくい庭のかくか附様や花れ王と見ゆらん 猿人
入相の待子ちうけいこくえても風いよふと花よらんへさ 金埒
三度ふふねよとわうけいむれい命いもふれ下にをあれ 取積
け基をちひされとや霧基くもえて見せさか清みは基 東作

十七 春月

ねらら萩 霞む萩の月 光ともうすむ 霞むまはま ささくにもあく
むつきの月 きらく紀の月 うすみよあくむ
くあふとも又ちうくも一向に氣象たつぬ基の夜を月金鶏

十八 春曙

くまむあけの 雲の横雲 山のをすむ 山うらう 志の光
花よぬり 霞まじふか 霞よまじむ 雲をのこる
耶那の梅とあちうまち風よさえて茶花の基乃ぬ不の光

十九 遅日

くれろた いとほある日 それいく日 様にくらけ ひふ糸
のとうある風れをりくめあられの基の日掃れのひじつ 白壁

二十 遊糸

おそふいと そむふいとゆふ 風より出は 春風のひまにわさふ

其の目ハ次ハもゆふをそむきまらうら 一人は折ふ糸ゆふ 仲塗

二十一 春雨

木のやまらさあ ころもをらさあ 春風のー 春風のー 春風のー

折のつとあ 折のつとあ 折のつとあ はくくと ちるーつとあ

ぬるともゆふん 春風のつとあ

千金のつとあ いまといふとんやうらふ小粒とやうてふはる春さあ 万象

二十二 春駒

野への芸術 いまといふ いまといふ いまといふ あまの 春駒の作

伯樂ウ名をすえてや放ちては春の野への駒の駒いふは 三院

二十三 帰雁

けりて 帰るー ーのーつとあ 春風のつとあ 春風のつとあ

厚の玉つさ 花をえすてー 越路ーつとあ 由良の戸次テ

あー

ぬらぬらと春て帰るは花みして様もえはよいそく 一金 雨付

二十四 雉子

きくをふく きくを帰のー つまごひ 不ろーつとあ 子をたれりふ

ありうあうぬ やけ陣れきり 暖湯野 春日野

きくをふくにきりはらんをえんとて春れきりあまよとや唱 美憐

二十五 喚子鳥

女よふとら 人ー 心細くもよまれぢく 山ひと 人あは山

むくしと様ゆしてぞく呼こころあつても見まひんくもふまひ 金塔

二十六 苗代

あいらろあ 小田のおがらろ 綾りー ままうを う孫まう

ゆつろあろ民 門田 子断田 多羽田

尖る筆のまう死不とにあいころの不さ死を降る水葦の小田 音人

二十七 董

まこれくさ 野へのまこれ こむうさ死 わさぢふ つぶさく下袖こつまん

白ふすこれ

吾姉子うまのあうくられつ不すこれおとワけてつめととらふと しまん

二十八 三月三日

桃の重 重の花を碎 八重桃 くのぼる

川久あはる野野のまう山きたりうう人のほまぬそまぬ 沖風

二十九 牡若

かき山をさ 池のー 沢邊のー 春こめく咲 白ふ川邊

汀よささふ 三ぬま や川をー かりやうぬま

原さきうほやうぬまれき山をさのやめのまを卸き社すれ 定丸

三十 菘花

ふちあまー ー 川りー ーうえ 田うりれま 若むくま死 若ぬまあふ

松の菘あま 菘うけく咲 甚日 佐よー

さふ娘のいと息このしてり甚れうら改や菘乃まけのみ 白人

松くえにそひんらまうか菘の甚甚と甚と成まうれてそ咲 人成

三十一 歎冬

さけふ山ふき 一の鳥 きてけー けふーのま いまぬま
けふう内ふ ちあるは 垣ふにさけふ 井手の里
後茶れ茶あけけけー 身ふるひは馬の鳥をふ井ふ山吹 卯雲

廿三 蛙

かみふく 小田のー すくーー けけ 水子位ー 井ふけー
古井のー 綾ヶ門田 このまかのもにあく
身をるけひれおらまてそそと智あ成古井に蛙あくし 東作

廿四 躑躅

けーー めちー 岩ねのー ねのー 岩れー けうあき
ともけ 岩ふけ藁 けふふ山
宿うーとられあわ里の岩つー火とりーけけ物 白人

廿五 燕

つをう 朝れー かくー 中へ成けられぬ あふすとらぬ
ねとめとあふふ ともよれに
つをうも何 大らとのあちやうんやうにうか橋乃海さうう

廿六 雲雀

あがふひをり 森ひをり ねらひをり すそ群のひをり 夕ををり
ーのーと 雲井ふあふか 重股とすふふ 重股よきあふ
群よ白ふ烟の茶れ茶ひをり色をこまうにきだむをふか 世 天長

廿七 暮春

くれゆくま 春のつれ 春あけらん 春成う心 やふひのくれ
死るのかり ますんま 志なきま

千金よりくるとふまの目も一五日とありにきふ可事 ばん

廿七 三月盡

まれとぢめ ころふくくを 入相のうね ちるれくれをころと
ちくむま いぬふま へんねま ちか成くたりにゆく
おまにま 藤の袖れりれ まよひ久せ
三月のつらまとしちのふふ給けぬきうりままうまら 不埒
やふひもはらの夜念すめぬいみりれもかへ花のうらま 岡持
花らうてままぬしうのうらつらひけく春のいとまこひか 光
まよふぬきうまらうれ灸上戸をくめとらうひとひとをる 漢江

闇雲愚抄卷二其之部

一 更衣

おつ衣 ひえのー せまのをー 花きー かたぬこー藤のー
花のこつと ぬきうら ぬきうて ちかのまのこせ
きのふれま ちまくたき けさうら

花のまをわくそくふく思久ぬを給りぬと人やうらん 正式
毛のう成とちし後まいつらうらんふの衣れあらせりのあり 軽人

二 首製

外月のちりめ 花鳥のこくれ ちん山のま ちりのこふをれ
まられしきのふ ちん山をまらり ちん山をまらり ちん山をまらり

美知ふき小ををららう 散つく 涼しきころも

暮られしきのおろほれさあうららふのうきに成るるに 曉月
花のうきをさうし大徳ありぬに松葉子似るるの横雲 金埒

三 灯花

さけあうれをか こゆるし ぼふし 垣のし 夜のしきりのし

山うらのうきね 湖あうぬ音 暮ををられし ませうた うる

山うらき 一むらさける 月影ましまふ

月香とるる茶耀子餅の皮むふのましにきころれを 直ぬ
若松山打ようけきの花をさみふらす人を川ひしく 重佐

四 残花

ちりのころ花 暮のころにのころ 暮山を

嘆ぞれらる 青葉に白ふ しくく白ふ

さかぢたころれを 暮をしのふ

花に招きおこし夜の花の友山に暮らうとさうらうらくさうらうらも 智恵子
友山のこころれまぬまぬひけし花に花の計はたりるの 栲海

五 新樹

青葉 友木立 美葉のこころ 花のあと 木のしたす

志けふまほ うけくたえまう 山のねむらさ

花の山白ひあうらの暮をさくまをさうらうと成まけらる 羽鹿

六 牡丹

ちんち草 あうら草 名とり草 赤白草 花のともみ

十日つと暮と友とに嘆けし花やうらうらまあふくさ 赤良

桐花集を催文よしとてあらしむに件のこころはるるより 金

七 葵

あふひ草 のちちうは 世よあふひ草 かなあふひ 二葉草
か茂のこわれ こすれあふひ かさ草

春の忘れ鴨のみわれのあふひ草をよめてうけり袖よそあつたる じん

八 時鳥

さふなくまは 山一 ぶく一 里の一 志ての国をた 名
のふ志のひぬ ちうちく里 雲井よる 暮四の月 かくやみ月
たのう又月 ねちうとあく 一丁急る家 ぬさあてま 成すのこま
不のうよあのみ 附しと白くあく むらぬのそく 今ひとあま
をよるもの ね まちひ山 若らう あふ坂 山のちう

後 伏見 七さし 忍の志 あさう 志里 忍

附島自由自在よまき里へ酒をへ三里さうめ々へ二里光
すそあのみちいふれやけりすて笑ひ一山よあく不とまは 三信所
あれとふすもあうとて乃附島雲のつ川よはまあうとん 米入
附島次方の浦ていふれもたれをす川うせむぬぬのえ 橋ゆ
初菰子花ちあ里れ不とまはちうさあねよと一日のあけ 美敷
ねもひもさうとく之あああのか合がうけりきくわうとまは 金雞
お母子よ入さの出乃不とまは一口あうけいすはえあ者 全
附島あうちう里とけよあくと只一志の今乃らうとん 陀羅神
波もよ帆をあけく空うら不とまは沖をえさる今の書 萬葉
書ハさうとて乃らうとまはあふひ志やうねし子あふひあく 右

九 菖蒲

あやめ草 白ふー くのー 朝のー 一の雲 一の草
ーふく ーかほち 花ー 池のー 沼のー ーえりぬ
のきれすなく ーのきたふく ーあさるれ沼
お政よあうぬもろあひひきうてあやめを朝乃妻ーいんろ子未得

十 早苗

さき入 ーとふ ー子 小田のー 山田のー 辰のー 子町
門田のー 葎の小差 ーあせきつて 山田の志川 ーすそくかふん
田子の浦 住よー 井手
妙の女も子苗とふあよへりあよくあうぬや葎の小差系流 眉佳

十一 照射

ともー のかけ ーすふ のこふー ーまきー 下の光り
入月山 葎のたひひ ーよふ麻 麻す川 枯えのつー ーいふー山
二村山 ーむさう祥

十二 糟河

うあぬ 取川 うあひ ーかこ 夕や ーんく 鉦 曉やと
さあちかす史 糟川うを 大井川 ーあう川 富原川
もくも川 空沼川

の手せてい船くろくせてとる魚のはるありかうぬけふろ川い 二巻
世のうの橋士乃小船のほきてよと糟の咽着れつあや興しき 一巻

十三 五月雨

さここれーの尻ーの目とあゝのきれーの口とあゝ
 うられーのーあまはるけとあゝいそあゝまをかく
 ける涙もあきあゝの朝まねやうぬをあゝあす川
 ぬおの浦あゝのうはーたのうま佐野の舟楫
 布引あゝうらたさるみ月雨ひと幅をろくあゝう滝つさ金鶴
 初織あゝー子よとせらあゝあやうとあゝあぬ夜の五月夜裏成
 さゝづれの雲れ衣のまを海さつ門ひよせまてさかく法師江戸住
 雨の音午の夫えとあゝーきて五月の雨のうぬれてそらう次丸
 ゆくまの甚をけーとあゝ兄とあゝもかて音すんさゝあんのの俵満
 朝近く雲さつれとあゝ人のすれまもあゝぬはみあれの以遊狸朝

四 重橋

あちもあゝあゝー白ふー朝のーのなほ里むまこさ
 むまもあゝ世のうと移る音極ま白ふたり袖の音むうとあゝ
 菓の大將とろをんくよけしまうのつらりのたちをか乃つ後教人

十五 瞿麦

とこあつ白ふーの花ーのあ群くのーあてーと
 女まもあゝとあねもけあゝ花のぬれうなつゆのやううか
 あゝあ白ふあゝのあゝこやき群長田群あゝ良片岩
 とあゝあゝのあゝれたりうほと秘うつけさうあてーとあゝ漢登
 のらふてもすさあゝこかたあてーこのあをふれてい志をれてあゝ白壁
 すてられていそり雪月はたらうぬれあゝもつるぬ川系あてー

十六 螢



とぶほろろーのこもは もちりー ちふーー ーかろろー ぬのー
波のー 浪色のー 水のー 牙をくく せのろ光 きぬぬの
ききくすぬ いそぬぬぬ 宇治川 宇治川 あは ーはは
世の中れぬもほろろきかぬぬ金々る雲ははくはくやく 雲雲
名のつじ源氏の雲やすすれらん光とあがりけーけるあろろる 向

十七 水鏡

たろろろあか 飛まのー ーのさあはこあろろぬー ーのーぬ
まろぬのろ ぬさあろろ ぬろろ 竹田の里
おろろろあろあかのちりけろくろろ友のえ不くてやろろあり 雲丸

十八 蝦を火

かちり火 ーのー 志川ろー 里のー 春のぬ 々ちろく

いふせぬろろろ ぬせやのろちり 下むせふ
ろろれぬろの枝のぬあろろてけけぬろとろくやぬぬろ火 鳥麻

十九 夏月

月を涼ーき あけやぬぬぬ ぬろろーろ夜 みーろろ月
出れへあろろ ぬあろろぬぬ 夏のすけぬぬ 夏のぬぬぬ
夏の夜へ月のろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

二十 夏州

おけくろりのちふ ーけろろろ ぬぬろろろ ぬぬろろぬ
るろろろろろ 空しろろろろ 草のーけろ

旅人も小けり安なるあ舟よ花のちろろろろろろろろろろろろ

二十一 蓮

もちすをの春 ちのふらふ ちのすれを はらふり
ちすれつる系 池のちちり ちすのつと ち涼し
ち涼のけこくえんや蓮系ふはちちくときくち涼なる 秋入

廿二 夕顔

夕顔の者 一の朝 一のあ ちけり垣ぬ まちられてゆく

あつと垣ぬ ちちちちちち あその袖うた うきぬまかふ

の東

廿三 蟬

せいのもろも 一のもろえ 一の泪 こくれこくれ ちもちも

ありてこれ風かきれと合款のふれ縁あうやまは蟬のさく 景好

廿四 氷室

ひむろ山 一入りり こその氷 とけんともあき てるぬもあうぬ

夏の介あり 枝の下風 涼山のくけ ひむろのたわし

謎くやあをひむろのあき月へくけてもさうにとけぬあん 景好

廿五 夕立

夕立の雨 一の雲 をやうと晴り 昭神の言 風を争い よまふぬり

山風をけく ちちちちちち ちちちちち 朝の玉あ 茶もふあひく

夕立の雨のあしをちいねんとて 盤をりりに出してをく 金鶴

天子口ありとくまけり 皇のさうそて天りる水をちくく 夕立 只取

廿六 納涼

夕涼門 一の霞の下陰 ちち秋風 このしたすみ ちち川くむ

ち山のくけ ちち涼しき 秋をちち ちちあくれぬ 涼む川くむ

足踏まのく下踏まのたぶくと浅深水の流てま〜秋橋
あつさまて解しつゝをむくのこくむま清水の流をす〜光
流を〜手りあふ命のせんさうあさこあくのりはけよけ

九七 荻和菰

あつち〜 ふうのま〜 くらえり〜 月ま〜 くの〜
さぎら川 あつこの林 波のあ〜 ぶ〜 麻の大ぬさ
あつこのわね あつこの小川 た〜 加茂 いす川 住よ〜
あつこのあつと水菰のた〜 流ま〜 二橋の川流 金器
餅よあさか鴨の川流の夕飯のお餅を〜の水れ白あふ 光

江田

周雲思抄卷三秋之部

一 立秋

秋の月日 秋のまよなり 秋の〜
秋まぬ あまな川を 風うらふ 秋の初風
あつち〜 つも 水あちか かけき枝 秋の〜らあ
秋のまよなり

二 早秋

早秋の〜と初の一〜は秋風のよれ〜ち〜て〜ら〜ぬぬ
秋ま〜た〜つ〜あ〜あ〜ま〜ま〜く〜病〜て〜人〜と〜ら〜ら〜た〜秋の初風
之田山あ〜のいらはも〜習れま〜身よあ〜ぬ秋の初風

解

七の枝の三番目うらなふくとすむ志のきよくありやすくこのせ

三 残暑

のころあつさ 夏や久ふ 夏とつさねぬ ありき残のこけ
秋浅き 夕風をまゆ すとぬき解

子箱の徳分出れと枝の端をいすこくまにあふぬ暑さ 徳分

四 七夕

あいのちきり ひそくおろね あふみのふく ぼく合のさ
紅糸あはれし かさねのそく 川の合のさ まちこくさ
天の川あひ とらふあひ ねらひの糸 雲は衣 くる糸
あふふ双 さうおの水 うくこそそ

南隣の根河をいす七夕はあやましくしたる一片版盛

東西より相撲の二の星あふの晴天あふのこ一子ち 輪起
七夕のあふてふとんけあはれ子とらふれはさく合の光
この川のひらりかすらうと後くそわらん 篠田まななく 長八
七夕はあひのあきとてあふとれと後か舟の帆はちやも 金鶴
七夕のそくは列はよ一帯つとあふやれく二十八名 二龍
かさねのつとせあふにを舟身とあそ土まの車留せよ 定丸

五 草花

ささのま 庭のどたつ けめの下萩 けせのをぬをき そよく
秋のうき いとらさき ぶさね ちあらの萩 麻鴨の舟
まやま浮 女舟の花 ちあらのさあふく ちあふをく
さやく浮く これよりきり ちあふき 志のすま 一のすま

戸す母の唐　　こころく
 初尾をか　　尾をか袖　不にづか
 まぬく尾花　　入狩　　まの入に　　つるや　　ののるや　　尾の若や
 あちをうぬ　　不ころひつる　　よみ案　　さうんり　　し不あ
 一狩よ白ふ

六 萩

ありらねは家子清りく　　秋風のす　　しや中はつ世のたまよき　　搔安

七 萩

吹まらすくの　　風よ仙人もあつる身の　　し　　まらた乃　　秋　　仲塗三

八 女帝花

ともあへ　　さだる月のべへ下馬とせよかの　　遍昭り　　はらもの　　場合　　雄廉

九 尾

秋風の吹よつけくもいとすまきあひあふよりこそあはれ　　しん

十 蘭

風のよに不らりや　　とやふちをう　　あひよくよ　　つきて　　あふ　　矢値

十一 雁

を向うり　　たのむれり　　天はりり　　雲井のかり　　い　　つ　　こ　　つて

かりの玉つさ　　疎路の標　　月よあ　　ま　　れ　　ま　　こ　　て

光陰の英根あ　　くも　　ま　　の　　ま　　かり　　ま　　こ　　ん　　ゆ　　あ　　あり　　あ　　き　　乃　　る　　光
 南原れ　　ま　　ち　　月　　よ　　ら　　ふ　　一　　今　　の　　雲　　井　　を　　あ　　ら　　れ　　い　　つ　　り　　ま　　の　　あり　　市　　人

十二 鹿

ことろ　　つまろふ　　こころあ　　尾の人の　　麻　　ふ　　あ　　れ　　し　　り
 ね　　あ　　ま　　り　　け　　ま　　あ　　ら　　ま　　り　　狩　　水　　く　　さ　　の　　岡　　さ　　か　　狩

秋の序よあはく小男麻の用おれハコノヤナリケモヤ急ぬらん 仲塗
二三丁まはしやも麻のぬハたぐのうられりちあふあはく 雄吉

十三 序分

のりたの風 花序あはく 草木をれぬ ちささひき
序ふれけさ 林すさまじ 木のむらぬ

あつらゝき壱まで頼とふらゝか序ふれあはたけうゝもあ ちん氣
鬼そのり安をうらゝも吹あれて序ふは骨たえやあつらゝぬ 彦孫

十四 長路

朝つち 夕ゝ ーワけ長 ーのゝゝま むすふ ひろり
葉にさく 不せま ーゝゝゝ

ぬれぬまたそつゝひゝゝとまゝてまの流るゝ能くされ高岡持

十五 雨務

あさきと 夕ゝ 秋ゝ ーま ーれまき ーらのやふ
ちんく こむり へん けされとら 足んく足んすゝ

足あゝはらけりゝき火を秋きうああけもさゝらのありけさ 鬼貫

十六 槿

あゝのむけ 志その袖た たく一日 日といふ ちうふあうた
ちんく 花のすゝ 志のすうた ちうあき

もちあゝあむらの若れほほ笑おもも目成いとひことすれ 雨什

十七 秋夕

秋の夕なれ 心よりそくあは 心つゝゝの夕言 あきれあうれ
こそえさひゝき 袖ぬゝは夕

乞ふき方も涙はなれりあはひの跡はあき乃ゆくと定丸
菓子と花も紅もあけり口癖一され秋の夕暮 吉原

十八 約途

もち月の約 きり糸のー 甲斐は是約 冥子あふ 乙戸ひき
あさりの秋 雲井ようけか

このさあしのちよとも靴はありて使の首をきりりつれこそま 雄老

十九 月

もち月 弓をうー ーれくろく ねまらー ねまらー 出のー
すやろー 山のそれー ーれふけさ ーれん ーれ魚 ーれ雪
ーの鏡 ーれくま ーあー ーうろふ ちりもふあめ 秋のす
らりもふらぬ ちりぬらけ をそすて山 須戸 あろー

むさー群 きろーか ねみ山 廣沢の池 すまれ池

かややくたたくえゆる世中とろくまきくろくやのそく月 ーのけ 赤良

めはろくれくえりそとつらふにとまれ秋は仲まはる月 裏成

むらう群は麻はあれとも十三夜こよひは月よふまはる月 ー

晴天の青砥はあついくふんあふ庭よ入ふ千金は月 輕人

かくをろくさふたれらるはれ月くけとれくまやまー 光

てる月の桂男よりとてくれた今もうけそむかあろあはれ月 其原

まきこの海と山とをひきまきうたまくて出たらあーのやれ月 金路

雲の浪よぬまきとまきんあま月風きけ出たら名月の珠 橋剛

二十 話

うつらかく うつらぬ 群へのうろく をのろくと 雪うれ

花をくれ 涼葉れ里 まつゝい

そのれくろお言にちりれてあくろけいもふくさく 光

十一 略

まきのまひくれ 一山は 一れをせ 庭のまじり りをくれ
ふは 一山 あさくれは 一せの流

蛤りちりを志門くとまふはれて時まうぬり秋の夕音 版盛

十二 秋田

小山田 門田 こそせ田 こそて やあま いかをれあ かり不は
いかを流すも 山田のよふ

十三 樹衣

もろ舟のよりろ秋の漢田をまろくろふちりまは乃指 常服

かりころも 衣の内と きぬの音 妹のうら 歌をの衣 槌の音

あきよはたろ 里れきぬの 小夜衣 月まろり

秘あうくとふろくやうを塚れ拍子もぬけのかりころもろか 智壽子

あもものとげてあろした淋しきかくとあくれ音ちり兒里 蛸蝶

十四 虫

すんむく きろー ちんごりー 一れね されまろりー 一れをえく

きろくは すすぐ ちんごりー 吹よ音する ちんごりーもまろめ

むろくれを 秋の野 野へのちんご さらり孫 むろり井 まろ里小孫

大系や虫もさこねのふはろく馬遊もあつたこ織もあつた 京侍

夜多のちろくろくしりろの登の孫虫のねろくとまろりよゆけ 卯雲

西棟ハあつた相生の山中らちんごりひのちんごりよゆけ 金鶴

廿五 菊

あつききー きのーのまら 山ちのー 老せぬー ーのまらき
ーのまらきー そのくー ちよれ白ー ーじろー 忠ねのー ーつむー
八重さく花 あゆのーとせ 星の光よまらふ ちる袖白ふ 菊川の里
うー孫川 吹土のを霞 まらぬの島

百草の子秋ふとちかまてもめてくくはゆら菊れさう向き 美敷
ふとちかけくちよちよとてそれくよはる名うつふの菊のを雲と 三和
白菊よあふふ美まても慈目よの北斗とさそふこくひうところの 古花
あうあうもいとうととく痛くうらまきこひのつぬ美菊うか 井隣
をきまてふせらる美よりも当世のむあてまはす門さうゆきく 兼人
作の菊も入子孫とわらわーの花をのぞんくもに社あれ 定九

廿六 九月九日

くふらうり下戸よ美つんのきこれ酒ちるあ斗のめやうく人や 卯雲

廿七 葛

くすのさ まくはを くすりら くらせのうら風 んほの林くせ
とつづく うらかれ ちあぐす いおと孫 とまの杜
何をさううら恨く葛のをれ風よあめてをありせさうらん 九家

廿八 紅葉

を門のこち うはー トー 中不のー ち不のー 岑れー 七
山姥のま深 うら移 うはくく ちかか めくし海 ちあおれあき
立田姥 さきゆのちち とむら山 くら田山 あうー山 ち向山
のちちあふふく不而く不志りーとてか孫とふ人のちるん 漢江

独居ておもしろさの御紫より思ともふまん林らん乃洒栲河

廿九 暮る秋

ゆく秋 秋の暮る 未未れ秋 若月の末 とほりぬ秋 久ふ秋
秋の名らり くらげいとさき 秋もいぬやう くらげのワレ
秋ふくく深ておろりとありとありとあつとあつと袖とくちりゆり 江住

三十 九月盡

若月の秋も若月の封しめとゆれハツふくもれ月あき 猿人
あすこをぬへる秋よとあふきあを門不寝よあれとくれき 唯住
とくめとも御まのまに白あを志もにむすひてふふ久ふ秋 光

園雲愚抄卷四冬之部

一 初冬

冬くのちしめ 冬あきになり 冬きてら 冬をきくまら
秋マ月 来ううー 冬を淋しき 秋をむる 初しめ
くぬもろく 初あをたれむら きのふくを林とくれー
冬このり びくく煙火

か見よの神り出雲之夏とまよひも冬とことふれ 飯盛
おやけ声あうれて山嵐のあん内さむれ冬乃つらとくち 掃安
秋の日もつわ十月とけー坊さつらのるまやう秋もさうらう 金鶏
池水とゆのあなをくくまよくあしは鴨居れ冬乃入くら 光

小ぬう母と付あつるる山原の御系代共れらちやと見らん 金幣

五 霜

朝一 夕一 在門一 一うれ 一のくらゐお ちねさゆる
 むすふ とうる ちねのまうき ちねのねおね ちねの下葉まきちねの白足
 わらんきのちね

赤一のふふと立ち一吐もそらうくと志もうつもるるちねの面うふ 雲
 白異のえきうらうらけつわらねらちねのほろきれおれいんがり 溜心

六 雲

あらしあふ 一かり一 一とるあふ 一とるあふ
 うらうら ちる 五一一くち 空うくまき ちねのつこや
 あれをそ一不破の雲ちりる役もとらねあしねのちちれつこや 橋河

七 雪

左門あき 白一 一ねあさ一 ね曝 一の夕ふれ あり一
 川のらの一 竹のをれ一 ちす一 ちね一 一のむきえ
 一うらちちふ 一ね山本 ちすあさむけぬ ちすらう一 ちね
 ねの下をれ ちとつる ちふ人の情の泣 ちうらむ けぬう上り
 ちう一とらる ちいがね ちう ちね 富士の根 ちう一
 ちとちてけ白雲をふませ一と制の詞乃雪れ夕うと光
 ちふ人の情のちうさのちねんちねに孫まき一ちね ちね
 降つちるちねを達上りばらうけて巨魁ちねちねを運ん ちね
 ちねに孫ちねのちねちね一にちねちねとちうちねちねとちね ちね
 ちねに降つてけちねちねのちねちねのちねちね ちね 酒船

うらうらき其場をうけく物すらや萩らうらえらに雪あふ竹 金成
雪の目いとしちいとわら物あらし巨燧よりま月較てあき
雪あふは代まのりてうかれりや萩にあふふの雪あふ 小ま位
降雪を銭毛のたやうくあふあしにやむるれもつらう多紙 飯成血

八 寒、芦

うれあし 志ふれし 志ふれし 志もくれし 志もくれし 志もくれし
深き水し 入江のし 難波江 とう波に

九 冬、月

氷の月 新 霜夜の月 月れ氷 冬夜の月 雪の月 雪の月 雪の月
雪の月 月れ桂のくれぬ

十 千鳥

かさそのれをける月のすふとふやを山松乃まわしきうもく 橘洲
さよちとら ちしし さまし とうし 友ふし 友ふし 汀のし
絲さめれし さまし 友まひりた 松風よの浦かしくもあく
浪し 浪し 浪し 浪し 浪し 浪し

十一 氷

うすこもり ーあまらり むすふし ーうさぬる さゆり嵐こりか
けさたし ーのしとちめ 池れし 谷のし 夜はまたし 家
ひもかみ ーうさるる 志何もし ーるじ けら
山姥もあふいおれをうさるる 氷津せぬひやとる命引 雪あふ

水神のちちもあつらひのうらををりしおに子乃りかむれを 金鷄
ちかされぬおのけしも梓弓あてれつよさまはうはゆるり 鴨子

十二 水鳥

かも きー 丹海鳥 をしれ毛衣 波の松 むれあり さりく
とりのおすま うきねのとこ ちひ羽 入江 浪のうき浪
ねまけしー 羽うのまね

はるき、胸の祖をさうしとあうたらふみナ後の川乃をしれ松田 岡持

十三 細代

あゝろあ あゝろあり せいのあゝろ あゝろれうらと あゝろの床
宇治川 うらうら川 ひとのよふか ひとのむか
はま虫の似るや宇治の細代きあししくよひとさうりこふか 丸家

十四 神樂

神柱 ままよ袖 ちやくて あきうられ声 榊葉 うふつら袖
まさらのうらう 夜れやと竹 ちね夜れを火 とま衣 杜のまぢあひ
ちやくて 甚日 八幡 加茂

いあ人も甚うう紙の引もよらとあう面白とのそくあううら 表解

小夜をてうううあさきけいあもはもかんーいああ表のあううら 金鷄

十五 佛名

とあつら世の佛 ほうけのうらをつら 身ははりのつら
ちとありとああうううはははのうあひらうそちあ入つくまん 自主

十六 雁子符

細、岡

あしたり ちうふのうら まうあれさう ちあれのたう あうたう
たう引すて たう人 粘くは ちかう群 うまかりを
うり衣 たうのり清 ちうよまうふ

草花系君をまうよまをかりはちうのちあれるとまあちう 渭明

十七 炭竈

すまがま 小群のー 松のー ーはちうり ちうはー 炭やう

小群の里人 大系山

山のうこれちうのちあう山はちあもせ影の根まうりままうーとある 本細
ねえよあうぬ山まのちあれちう炭やうちうりあまの白あ人 金鶴

十八 倉

こあすま あ門ー あさー 後まれー ちのちけよあまうー

ねやさむこ さしり後

ちのちけよぬれちひるのちひーまにちやうちうはちあちあすまあ 常順

十九 埋火

ちうま火のりこ 釜のちうま火 嵌すれ埋火 ちうふらうま火

ちうま火れちうのちま ちうまをた まうの 祿是れ友

埋火の火まをとまはは字とちあまうちすまとつたちうち 折吏

二十 歳暮

ちうれゆー ちうあま ちうれぬ ちうをちむ ちうのちう

ちうのちうのちう ちうの目う門 ちうーちうま ちうのさう

ちうのちうをちうちう ちうれちうり ちうもちうひかま

あすのまをま ちうちうちう ちうの隣 ちうれちうま

子ひりえ 年ハひりりり とうれ実者 ちちちとぬらぬ
 とうのまね松山 ころころこれぬ 其まきちうた
 けいれ尾路うけく控引の一天かとはありまけふか 金城
 とう信のうかりひさの志らまきちうた 周持
 を解の仕旦の白の一样とともにもこれとちつきにた 版燈
 一年のむらり大根ふ掛ちをかうてえにきもれあさる 金結
 福のうな鬼のうても所方たまあより外れ事ハ福のい 查細
 鬼ハ内福ハ外ト出はともとひとひつうとせほもか 雄鬼

六一 除夜

蘭雲愚抄卷五急之部

急すてふ ーかハ ーころ毛 ーつひぬ ーひひん少
 あつこのころあふ ーまきあふ つちまも うちとけぬらけ
 うや入 うくあもひきれぬ うちよ出にたり つひあさ
 ねもうけの おひひぬの ねのひあまか ちまりて とうりか
 ういまい ーまきつーても あくうちく いまか
 甘夜中せと人よりうけらるーさよ家物の大れあつまけも 光
 ものうぬむりに今引くうすつて君よりうひ返たり 市人
 うま人をあつちせらるかうねにまきもあけのあつとまかり 世次

たぐと意の深き君の心君の目もこれに引きく 仲住

二 初意

こゝろしむ 心ひそむ 入初意 心そむて 心これ初
おれぬを後 初花深 意れまむ 意の初
只ひとちるの初康の山とらしそねるを心と引き初
こゝろも人の心とぬきあはさるそちくたう意の及ま 備門

三 思意

志のあれ 志のひね 志のあまぬ 人れぬ目一のよ
しれよのこれ 志けた人目 心はぬ中 心これ
袖の濡つせ 人目つみ 袖の志
我命あまのあまきあるよ心はぬ中はよきとらせり 飯盛

盗人よえとる者うねく知うや思ひてまふ意のまをと 橋洞

四 不意意

ありぬま あふより命 かまぬ中 あふせも
あまのここの心 下ひもれとけぬつ
あかの心 思ひたり人より氣のつまはさるのありてふまき
あまされのこく八卦をあまふに人の心をたぐうみぬふ 光
住虎

五 待意

待よひる 心ぬ人をうこ 中よふつた 心ぬよあ
文りる 中ら山 中ら山 中ら山
待よひる文り月の影うもさこむの心志中よあ
其の後れし心もあはちてさるにさるれ一調
何波補

六 逢衣

うらほまきまらう　あふよりけき　松のちりをまらふ　とらりひも
うらほまきまらうのまもあは　あふよのま　人もまらひか
今そゝあそまらふの玉子牙のつに逢衣の今れつあはたりとは　播磨
抱つけのあやりのうか君の肌今まそふあはらひまの似あ　後漢

七 初逢衣

とけそむ　あひそめて　又とあひえ　あそそむるまらう
まらまらう　まらえーちまら
あそやんとまらうり結うひー初ぬのらふれとそそあき　有風

八 後期衣

初まらう　まらぬのとこ　袖のらふらう　けされあつさうらうらう

つらまらまら　のころ月うけ　袖の乾あ　及まのあ

九 逢衣

のちらうつらまらまら　一夜そらりれちまら　あそらちまら
あれて後つれあき　つらうらう牙　たあや年　侍にらうら
移りうれあつらとととあふ小袖今ん牙ちもあそまきれぬる　しん

十 逢衣

あひららも　まらふれまら　うまねの袖　あひねの月　ときそり洞
ちらふまらちらう　一夜れちまら　まらもアふれ　侍のまらふまら
暁とつらあく出ー　かりまらう
接までもあとのや門とれともまらへのあーあかそとあそらほき　あ人

十一 田

あつてあるあひ うきー ちいー ぢやあひ ぢぢれあひ
あひぬー つーきー ーくは ー川 ぢぢれあひ
いぢぬあひ ぢぢ子師ー ーみさく ーれさく ぢぢぬ人とあひ
あひぬきちりきあーあひぬ何百貫と目よへえぬと 言ふ
あひ川あひえあんとちりけあひぬあひぬあひぬや 金銭

十二 片思

うさかひさる ぢぢぬ人とあひ ぢぢのーあひぬ ぢぢひらにぢぢあ
つーきーあひぬ ーあひぬあひぬ あひぬも人なれぬ
あひぬとあひぬあひぬへちまーもあひぬ人とあひぬあひぬ 番人
一たひよちりちりあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ 月守

十三 恨

うさかき つのうさき ーあひぬあひぬ ーあひぬあひぬ
まさうさき うさきあひぬ いぢぬあひぬ ーあひぬあひぬ
あひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ 岡持

十四 聞

まさあひぬあひぬ あひぬあひぬあひぬ あひぬあひぬあひぬあひぬ
あひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ
あひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ 成木

十五 見

あひぬあひぬ あひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ
あひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ
あひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ 不れあひぬ
あひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬあひぬ

廿四 近急

ほろなき中 ちろふのれを ちろとあり ちろれくちろ手
あひなきれまらうれ中 又のひとえ

廿五 隔急

あふ夕まあひ其まよひえ出されぬい君う近取の切うたぬ、定丸
あふ人のなまろそあつとも 夜とへる くとえら 日とこそ
人よあそとらう、

廿六 忘急

あふ急ー急よんもまめ解れれまぬ夜まよの中よをさめと 中栗
人よつとらうちろ こそれ水 うれいなる 人よとらぬぬ
ちきうらあき ぼろけ解まらふと葉 秋は扇 人の杖

人のつらさ めとれつらさ

廿七 経急

かひつらさやう 経急 経急 経急
かひつらさやう 経急 経急 経急
かひつらさやう 経急 経急 経急

廿八 老急

老の牙此 いくほとの世うー からの舌れつりの切ひ ち由れお
うらうらもらひあき老 老その急

廿九 切急

あふ急うけし月うのれ遠よていあをぬうーあよ老とくふらな 尺鷹

ひまをあらふ まつむすのれぬ草 草花をみくまうー うらうらも
ひめ小松 まてーこー つめむらさけ

まつらんあしを海もらけぬ草花を思ひ見物ー人の世をまへん 村竹
三十 思友人意

ふらりを思ひーらよあふあうおまよまてよまてー
こりかーやあふ二人も浪チあうーあふ歌を遠送る身も 橋湖

三十一 思三人意
つらもあうれいー人の世は丸男とまへんまーてねらうーもか 古志

三十二 寄天意
あまのまうー 雪井 雪うけらうー
面白く有頂天まてのほらねと意の山後まらふ思ひ世に ぼん人

三十三 寄地意

あうらひの土 土さうらあひてり 高し玉れあうまぬ中
あふ意ハ土終よそ 似たりりりいれてよう比も入る 岡持

三十四 寄月意
まー夜の月 待夜のー 文りー 筵の月 あま夜のー

仇人の心ハ秋の空をわつきのよれーそたのまれをせけ 暗嵐
三十五 寄雲意

ひらくも うたー 霞をたー あうー 夕のー 朝のー
題うらあふ世帯とも男をけーそあお山のふらつきたや 待雄

三十六 寄風意
風のたより ずんー くのつて 空あうー 男うーむー

し今風の針はやいのらまゝ一同じ様は君やも寝ぬるく 橋岡

三十七 寄山魚

いんせ山 あふ坂一 志のふ一 ずんち一 ずんち一

久きうつらなちうとひぬうあつりうもつじ山とあつて じん

三十八 寄園魚

冥途のき 志れそらぬ んの冥 いそこの一 あふ坂の冥

虎よりとも狼よりもねそらしや吾通信の算とりり後 歌を信

三十九 寄火魚

ひのれ火 志の一 ころか、 めかちひ きしぬふひ

石あそつりても見えん糸火の出るかとは君とこそと人 引方

四十 寄水魚

これをとらあやうき海のたぐへ船のねさうそちまうあぬふ 莉安

五 山

つ引の山 八き一 よれの一 ねく一 志一

ふと けりき山 じふとちり 一後

一又一 うきあつ一 一のちあた 一里 一人

一合うら九合うまり此富士をこてなと三々の山とらあらん 近江

六 廿

とけむに 一むらち 一れそとちり 一うむむ 一の志とあ

志と一 志ね北き一 志ねうそひ

惟りかくかきぬきせんをくともけうにじぬのすけれ衣ハ 常恒

七 雲

まおつふ ひかー ちろー ちよふれー ちろーちろー
薄の毛衣 なつる ふとせれな むせめろ 天とふ
万ねんの龜れよらひよろふまき九子葉つろのろろ薄撥安

八 野

野人 ーゆせ ー沃 ー中 去のー 友れー 秋のー
冬れー 紫ー 飛火ー さぐー 入ー
梓弓入野の葉のねひーきりちろりをんれとむらあまは 万九

九 薄

薄の糸 ーれちろ玉 ーれあ ーつせ ーつ浪 着るま
書羽の薄 ちとせーれー あふれー
むまんちろえちてもとんくにちれて着る薄れー系有風

十 栲

かけろー ちろー ひと門をー 里の松ー たおー
字後ー ちめれ岩ー あろれー ちろあ くりける
津の園れあろろの栲のちろちろあむ人のほろかりぬり ー人

十一 関

せきぢ ーれ戸 ー屋 ーち ーのちろろ ー後のちろ
戸さぬ代 人目の冥 かよひ後の冥
迹ちろちかけ糸衣の冥ちろちろて袖もちろちろをばー 笠細

十二 別

ちろちろか 袖のつれ ちろちろあま ちろちろえ ひあれ引後
おひひちろ ちろちろちろちろん 持り人

け人を今季乃とねくおあもつれうての備へ一里はり千百里
戻りたり子里の馬もあれうか列うく人のをふむけせんよばけ

十三 旅

ふむひごらも 一松 一ね 一此者 一此者 一此女 一此
松の松 やりりりり 着るる うまぬの着 まらふ一
接いたけられ竹のむく雀とぬりていうちとまりてふふ
江戸を出る一イニウ三イ四ウみじめに鞠子此者よまにふるふ
川苗にあまう居あう狂言よまど人あかく名所をそふ家 えぬ

十四 田家

田のもれ店 山田の店 うり店 田中此店 かと田りね
つかりら あせつふ すそられ田井

人よごをわめる世後もあうりなるあまのちたるりて丸屋ハ歳良

十五 山家

山すも 山くけの店 松の下店 志をれ戸 松おけあ店
まののらうー うき世の外 丸本の店 うけひのま門
おその山 むくら門 かぶ紫人 山之うけ店
糸河とに流る清水をむすひての命をつかく山のしる店 查細
は世をいらくすてしきれ珠散れく人もあき山を流ひのね 後丸

十六 老人

たいらく ねいの浪 おきあけひ ねのそよもむしそ
うくられ雲 ねいの浪 えあひの雲 老の坂

羨の祿つととらんと老をそく今いおとちまふかりたりと 有風
らとこし世のとうぬい杖よつく竹やそちしとやうめる 全

十七 遊女

うかれめ うかれつま 一宿つま めをれめ たむとあきちきり
傾城の月雪花のこらふとてしつらり川きよはれみはく とい人
菫こものこぬよらおちあかぬよれたのう味ぞふのつらき彩造 赤良
梅下此皮をちり人のねかせよてまもてうそふりこれびつひ 岡持

十八 王昭君

あまし敷とさる なるすうひく寝今 あくれそひとあむ といのこ
ましくみの糸 う門し息のうらみ
瘡あしくとうたさうたる次女難いらんせし人のまのこまなる 高峯

十九 楊貴妃

あきもまれありう すねろしよんしー あまきふし淨き
とくをそくまれまらう とまをる人
かづうしといひ此朝葵の羽いぬけくおちるひる葵こそさうき 高菘

廿 夢

そらふた也をえ 一のうきげー くらぬのー さむらー 一後
まけさき むすふ 見えそぬ まとらむ
あまのつあまこのやうはねよとをねえもあきあをこそこれ 李細

廿一 毎常

あらし世 くらとれ世 ちりき燐 ころり屋路れ燐 あき玉
きえし人 つらよりる うきりれ門出 孫への重殿 草れ系

末の家のいと此を下 母忌

子金のおひをあせし人なまじつら五つとんよくら世れ中 友佐
あふれよあまの鈴や孫れ皿つあふり野へのゆれものごとく 紫笛

廿二 寺

山てり 野ー ありー 入おのう縁 ぬりれ夢 法のちり

まきつむ のりれ死ま つも むくわ 妻をぬれ袖

とりの火毛清くそよあり古ちれ水よきし入の何あつつきふ 入安
山吉れまきの夕れまきそそれ入用のうひは捲るそはまきあれ じん

廿三 神祇

井のこま 天居 みる死 玉うき 志めか 白ゆふ きね

ぬきこそくく ちあつと やとと死 ゆふと 柳 又はけら

むめゆき 何とあれまは

廣まよふられんゆりねあつそそねとちうれ男やまの那 生歌
神玉のちうくれ程とまやけらふとあ野良もほま下々る 金鶏

廿四 懐舊

うらさたりふ ちうかこ ちうさのふ ちんてー月日とれのみ

遠はくかむうー 存れれあつと ちうれての世 男のむうー

老のむうー ちうぬむうー ちうされーれふ

老う才のはあつとあてくあしきい場といされー昔なうけと 金鶏
男のちうさつらふの昔まうく今いかくまてお箱さびくあ利 白玉
たのちあかりちうちのちはよかり其うーこにおはよくもつね 入安

廿五 述懐

江 江

身の不^レ成^レか^レら^レふ いけ^レか^レひ^レか^レれ^レ身 浮世^とい^ふ 教^をて^手する^身
を^まを^りる^心 身^ひを^けく

世^の中^のね^をせ^る酒^れく^ちる^の積^まる^りぬ^ひあり 赤良
世^よも^あら^いけ^りけ^りと^孫孫^風ま^ると^あり^まい^折く^もも 橋^剛
い^らか^れい^身の^痛れ^妙業^を十^金方^よう^きり^くん 金^難

廿六 祝

八^千代 後^門代 子^とせ 祝^の後^を國

五^日の^風 十^日れ^雨 祝^の死^さく 法^代の^後門^世

お^目出^さく^とを^君代^をめ^しる^こを^めて^あら^うけ^し
入^用の^竹は^いろ^くと^く虎^のす^まり^ふを^めて^され 米^人
あ^ふけ^松を^まを^しら^松ま^すむ^子と^せの^後れ^昔系^の國^金難

本^懐り^何う^かわ^らぬ^はあ^まは^らぬ^おの^れう^煙
肺^子と^いわ^かわ^らぬ^乃の^をえ^りを^怒し^る門^出努^め
冬^の日^火煙^のや^ほる^一ひ^はく^らお^にか^ん有^るぬ

二 狂の一字

狂^歌よ^俗人^とお^りふ^りの^らす^門と^狂の^一字^をま^るへ^一
論^語曰^古之^狂也^肆今^之狂^也蕩^鄭康^成以^狂爲^倨慢^以對^對
不^敬故^爲慢^也す^清狂^之狂^也樂^天詩^に問^我狂^歌詞^や
あり^は古^語に^狂者^進取^一槩^之義^不顧^時俗^云い^つも^も
狂^の眼^をは^くへ^き語^{あり}和^およ^らふ^もよ^み出^くれ^れ
心^の業^{あり}と^も進^くよ^みと^狂の^一字^をま^るへ^一
行^風う^夷曲^の曲^れ字^はま^がら^とい^つら^訓あり^をあ^やり^て

狂歌と書き多く又狂と狂と字形の似るふを何や有りて
狂歌とあしきあがひうことあせらるをむねんありと論せし
何ぞうらふ説ありむ川きやうり風いのまおひあむすとい
あれたのこゆは狂の一字曲の一字さうにあらぬと云へり狂ハ
まよふふ通りにてまゆりて狂人乱心のつらふいありさ
あり曲らうらひのめくあしして賦吟行歌詩と云ふ一
ぢれいこそ夷歌とも夷曲ともよひあむあり曲をせむるれ
訓あれいともまがらうことうらふふはさうよかうらうつ
おほありうらありかくつあれたのこゆり生涯のよみうこ
も一首とて三嘆すきめのいふに實は下は様すきといふを
り風うととあふく一版まう狂ふ百人一首と書述る

五 傍題の事

愚問賢注の頭所法附曰傍題と云事歎れかよす
ものさうらふありと中するありく信とまを人の梅を歎
あはれんあにすうにうみうかを傍題とつあふ六百
雨ふとまとう山の麻ねぬいしと衣の袖ぬじと

後成の判は雨ふれとちつとと袖はぬれたりから鹿
の影よよるとそまらえ侍は雨をせんおくして麻の字や
くく侍は侍りととととと傍歌あり

六 落頭の記事

おれの山月とつふ歌よて月をうみまれと山をよほさる
う落頭あり侍と山を盛とつり歌よ山をまてはよみ
まの盛の記事を落しとまらやう記事をつまみまら歌を
まらしてよまおらひのおりせう、侍のあれとそれの初ん
のまらふなりとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
字をうしふのうらやうによしつとつとつとつとつとつと

七 中野の記事

哉 中野の記事

君うと先がうらうらに今と長くうと家とかのひらかれ

おれうら裁りり

かへあつたにまられうら。おとつとつとつとつとつとつと

かくこのうれをうら中野にうら

様嘆き山をれまらう尾のふらうらうらうらうらうらうら

つ心のあらぬをあらあうこれ裁とつとつと

らん うらうらうられ文字をまらとらんとうらうらうら

らん いうそ うら うら 等れうらうらうらうらうらうら

らんとつとつとつと

雪とのまらうらを様をうらうらうらうらうらうらうら

山うきむの巖を掘りまき。つら且於のころおあつらん
て ころあり。何の糸よ心の結うて。よと心のあかて
のひまうして解情をあくむて

よしきふちうまていん。山様心の登をねもふははで
是心の結系てあり

日くられいあふ人い海。ふまちる巖の風れをくらほて
是よと心のうまてと

付れいあつらにむらうらるの山を月細くして
それいあうして解情をあくむてあり

つ ついつくと心のつまてはとあるはあつあり
田子井浦はあまうむれい白のあふつれあふよあるは傳て。

あうつくと心のほきてたつあつあるはあつあり

や ころあひのや ぬあつらとよんそせせしやうとつらとせ

月や花 花や紅もふれあふ

雲の雨秋の月夜と世よあつら花やねあはつらあつら

ねうひのや ころせもやあの勢と

糸うひすつらや やとねうていひあつらあて

よひつらあや みうし群や ともけやや みねてとや

かるといふ勢と

やすあたらや ころ何のやまあにとれたらあつらあふ

すのあり ころや夕日 あるやあつらと あつら相の勢と

ころころひのや 花やうらうん 人やとらうんの勢と

。かづるや ことひますくむのらんふやわり
 。あつ風と名の水とふくせいの山うづれの花をこさう
 。さうさうらや これ赤白や 人われやの影
 。あや うりては定さるふふこ
 赤衣を人まらうややーさた人の花のこをちんか
 人まらうやまらうのせま
 。やハ ややと回しくくふてまらあり
 急すむのやまを写解もつこれおの指とやぶらる
 赤月の外れものやちんか身の外とらふんや
 かえーあつと
 〇とや さひうけこあつら

け人をまよくく路人の花房を青にうらま接ぬせまや
 白の井とあれはとやれむとあり
 月秋の雲のけとありとや茶室か風の吹とあり
 くれの雲れとありとやれむとあり
 〇 その字れとありうくおれとまらなるれ字とまら
 とせえとー 花とちりあつ 月とやれあ
 の影と
 きの字あまくとあつらおをのひーまきの字とまら
 たらん 世とあつらにの影甚あまらぬつふ
 むの文字あまらむれと初んまらるまるとまら
 けくま

こそ こそとひていゝけせぬへめえれゑれ字までとあるあり
めのとこそをねりへ ありとこそまけ 君とこそまき かな
もてかしてあふ人

ぬ をとんぬ ぶのぬとをあふあり

ちりぬとをさしたのをせ梅のちかゑしき附のさひてまき
ちりをとえぬととらふとああり

き連つたのきとあふぬ山の中はたわひくあふも字子あふ
たつとあふとあふとあふ

ろ うとくひのり っは子通ふり 哉よとあふり

あふむり かなとそり かなのねととあひのりなり

つられまといふわんのめがわうては月とあふり神のつれを

こそねんものうなり

吹まよふ野風をさむと秋をたのうつとあひり人のをれ

うはりもゆりあれをながと

とふ をらりれりにといとあむりハよとあふてまをらなり

いとさうき今うんまてのるを月日へさくおあの人あふり
あひまやあちのけとあむりつとあひりあひり月とあねん

かといかふとあふてまをさあふりあふりあひりあひり
たはよとよあふりあふりあふりあふりあふりあふり

一 過去の一 現在の一 やす先の一 かなあり

まといのあふりあふりあふりあふりあふりあふりあふり
これ過去のあふりあふりあふりあふりあふりあふり

白雲よまおあふし。もも唐れねえ。ゆり。おのうる月

これ現在今うらふのし

ちう花のけよし。とまるおあふし。おあふしにさうま。やい

これ中せめよあきあふしあり

た 雑 不假餘縁。とつひて抽のさききまりありとれ

まびくくりちゆりゆにさふあり。初ふのうらひ文字のさ

ぬあふあふし。とあちゆりことゆり。大きにさほしきるし

たよ それだにくゆりよこれらさあふし。とつふさうあふちひ

まこそれをとさあふし。せせめくこれだにわあれし。とつふ

ふも男也

き 大うさたふとほし。むとあふし。

これまたふ。これよさ。あふた。あふた。あふた。あふた。

子にさの事申く。つらつら。これにわらふての初

公の為より。とて。右人おおれら。ちよと。十分れ一との

あつ。と。あふ。あふ。あふ。

ハ 三 躰

ふとく。大あふ。秋。あふの。あふ。

不そく。うらひ。秋。あふの。あふ。

あふ。あふ。秋。あふの。あふ。

あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。

あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。

あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。

九 皮肉骨三躰

皮

古人狂歌

蛤の玉れやうあるおすゝをいんらん同くはり氣れ毒よこそ
田楽のころれて君れ無しきいする山柙のこそめうる人

肉

きくやうに本のをつゝふ様たはむけがよい後るあひまよふ
振きれまう合うり申おれいぢひまらふもきうれさうらと

骨

君ろそを月落ふれいこそ無しぬり命を承い拾ひらる
九十九夜通ひ一人の足つゝまは足おき承いころをぬらふ

十

六義

古今の序よりける
風賦山陰雅頌とふ

才一風ハ

ものよよそくそその後をきくうーむりて故
そくそとふ

才二賦ハ

何をゆくきこつてはとかその後おれいん
うととふ

才三比ハ

おどろふとよむめいさう人よすうとよ何
たすうととふ

才四真ハ

かれふ是をふあふたてて真成よむたよ
ふととふ

才五雅ハ

たごころいふ儀あり正しくいふたれハあつた
まありたごころととふ

才六頌ハ

あわくよろはあけくほむりあり不むえいそいれ

るにれい祝ふとふ

け六義の事ハねむるあり説ももきえねとふくも
くつひつて一ノ事也一ノ意とくえんはそれ
はるよ記に

十一 十躰

今人狂歌

長高袴

河をやけさいきんもまかり出くたの々角くむるにあくく漢江
かくりめたくんゆり世中をうらまうくやのくく月く事赤良

見様袴

酒よ時沙用の外々馬車ちりりくくた市乃中く
田子の浦子歩出くくれいそ後北宝永山も書るあうく
蓬菜 仲塗

幽玄袴

口すれえくをまけくく夕うれと物あむよん入をよみくく也有
んく爪とあうにさくく死よん庭の書るね乃ちく書 橋例

濃袴

ちくちく柳の糸にむすひ玉んよう介にくくあひまく白人
従一重これくくゆめさすく村のめくまを通く百うけ 三和

右一第袴

時ハえねと西り此ちゆり目にくく河次乃秋の夕うれ 東佐
族家の雛へ馳走く農業を棚へあけくくもくくあうけと 定丸

面白袴

松よりく物あまうくくやうたあふ才をくくまぬく此結 志結

年の坂登る車れおよそおもひんをりては終るは

拉鬼祈

分よみい下もこそよけ止天地の動き出しては事おとほ
母の乳又のすねをそぎてはねて喰ふてふやうねは 光

有心祈

蒸こもれふよりあふ又りてはよ久寝る秋の夜もさ 直有
山里ますむいあしうききも実ぬ福よさうくう金財

車可松祈

汗水を流しておふ劔術のやくよりたぬ浄代をわを交 查細
三交ふ版ゆえそしうらじおふまにあらぬ世中 湖鯉鮒

藤祈

よひつぬまじりや夏よみう一降の花と秋の夜をそらつと 金埒
遠くわそ秋の夕まきり思ふたう吹きよ風のうちをそら 俊満

十二 祈用對

扇ハ祈

あふく ひくく たむ さげハ用也

雲ハ祈

たふひく 久ふ きんふハ用あり

對とりん事ハ

硯ハ祈

すこ も けいん 水入ハ對也

刀ハ祈

つむ ぶち くら 目貫 さいの對し

此神用對と不事とよくもさる人あつたれはうご一首よ
出んとすふり自由とさる考て考る人

十三 禁忌

おみやげよびつねり多変してよびうらひきんくをわらん
あふしき風説その世に津傍りきふれ事まで人を
おろふる人の時うらふら事おとほしんてよむ
へうらひ風雅の情あつたると

新宅よ

くらり たらり ぬきり 火神

香煙よ

きふ のり ともり きふ くらり

残別よ

あひぬ くらり ちちり

そはれふら考あつて

十四 七種菜

芥

鼠麴草

蕨菜

佛座

松

菘蘿蔔

十五 鞠場四木

柳夏巽

楓秋坤

松冬乾

十六 承香殿四傑

紀友則

凡河内躬恒

壬生忠岑

紀貫之

十七 新六哥仙

後京極攝政 大僧正慈禎 皇太后宮大夫俊成 權中

納言定家 從二位家隆 西行法師

十八 梨壺五人

大中臣能宣 清原元輔 源順 紀時文 坂上望城

十九 上東門院五歌仙

和泉式部 紫式部 赤深胤門 馬内侍 伊勢太輔

二十 西三條三世

實隆 道遙院 公條 祿名院 實技 三光院

廿一 日本三部書

舊事紀 廣戶皇子蘇我馬子奉 勅撰凡十卷

上養狂歌集 貞流狂歌集 貞德百首 拾遺家土産

宗增百首 由巳百首 難波土産

此外家々此集等以後くあれより大々世に傳へし
されりとの書ありし

廿六 今狂歌集

若葉集 萬載狂歌集 德和歌後萬載集

才藏集 故混馬鹿集 千里同風狂歌集

四方あそび百首 あふ心杯 東作扇百詠

木之阿弥風百首 落栗州庵集 百鬼夜狂

素揚菴家集 菅江家集 白人家集

あきや風呂 狂歌文庫 古今狂歌代表

大根太木狂歌集

狂月坊

銀世界

普現象

むくろくろく

汐下代土產

玉千多狂分合

狂分三十六分撰

狂分俳優風

もみぢのはし

狂分六より使

新古今狂分集

狂言曾我百首

拾遺狂分集

江戸名所狂分集

四方代毒一名毒告双帝

六七

五行五首題

木火土

金水

六八

五味五首題

耳辛

苦

酢鹹

六九

六根六首題

眼耳鼻

舌身意

廿四 食

琴琴

貞調

佛名

旧年立書

急十歌

忍急 渴一夜急 経月急 狂半急 渴急を詠急
不見書急 且足急 麻足急 待人急 別急

難三十歌

雲星

出湯

石

水海

原

滝

坂郷寺

社

林

桂

小條

萍

元服賀

七夜

仙宮

唐人

玉昭君

妓女

老人泉郎

船

隣

笛

箏

蜘蛛

猿

与不乃師其走... 寛政十二年庚申春三月開鐫

金鷄野客

燭夜文庫

金雞先生著述 全部三冊出来

風俗又選の體... 諸名家此おも...

三條通富小路

京都

須原屋平左衛門

大坂

河内屋喜兵衛

尾張

風月孫助

東都

大傳馬町二丁目

蔦屋重三郎

大和田安兵衛

寛政十二年庚申春三月開鐫

